

2023年7月9日 No.3675

先週の講壇から

〃 神の道化師 〃

コリントの信徒への手紙Ⅰ 第1章18節～31節

聖句「そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」(1:21)

1. 《愛の笑顔》 小難しい映画ばかり観ていた学生時代、恩師が『寅さん』でも観に行こうぜと誘ってくれました。シリアスな作品がコメディよりも高尚な訳ではありません。むしろ、作り手の側からすると、悲劇を作るよりも喜劇を作る方が難しいのです。私たちの人生も、この世の中も苦しみと悲しみに溢れているからです。それを笑顔に変えていくためには、実に大変な努力と技量が要るのです。笑うことは生きる力、喜びこそが生きる力なのです。
2. 《人を見る》 『パッチ・アダムス』という映画がありました。患者を病名でしか見ようとしない医療現場に失望した医学生が、ピエロの姿で病室を訪ねて、患者たちとの人間関係を回復して行きます。映画のモデルになったのは「お元気クリニック」という診療所を開いている実在の医師です。そこで働く人たちが大切にしている5箇条が「幸せ」「楽しさ」「愛すること」「協力」「創造性」です。人を思い遣ろうとする時に必要なことです。私たちが他の人を介助、介護、お世話をする時、自分自身が幸せや楽しさを感じているでしょうか。「なんで、あたしが…」と憤懣を抱きながらでは、幸せも喜びも生まれません。愛のない荒涼とした世界です。その人のことは見ないで、病気や障碍しか見ていないのです。
3. 《ユーモア》 私たちが生きる上で、笑うことが、どんなに私たちを助けてくれることでしょうか。一見、ユーモアのセンスの無さそうに思われるパウロですが、「十字架の宣教」等というナンセンスを連発します。処刑道具の十字架を宣べ伝える等、馬鹿げたことです。しかし、そこには、独り子を犠牲にする程に私たちを愛されたという深い御心があるのです。無茶苦茶です。常軌を逸しています。でも、それが愛なのです。その強い愛の前では、賢い人や偉い人が何を言ってみても、全てナンセンスに成るのです。愛というものは、自らを愚かにするのです。自分から平気で愚か者を引き受けるのです。愛しているからです。

朝日研一朗牧師